

家庭生活における「一家団欒」の社会史的考察（1）

— その学問的位置づけを中心に —

佐野 茂

I はじめに

家庭生活における「一家団欒」の教育的意義はペスタロッチをはじめ⁽¹⁾数多くの先人から指摘されており、現代社会においても人間が人間らしい生活を維持するうえで必要不可欠な要因である。それは、家族が楽しく集い、語り、興じる営みが、親子関係を築く第一歩であると同時にその雰囲気は成人の安らぎの場としても作用するからである。

今日、一家団欒（以下団欒と記す）の情景は頻度の差はあれ、一般家庭においてはごくあたりまえの情景として考えることができる。しかし、歴史的に顧みした場合、団欒という営みは家庭生活史上、普遍的な現象として認められてきたものなのだろうか。それとも歴史的相対性をもつものとして、現代家庭においてのみ固有な今日の現象として捉えるべきものなのか。つまり種々の制約が存在し、一見するところ張りつめた緊張の中での家庭生活が想像される、封建的、伝統的家族制度のもとでも、今日考えるような団欒は営まれていたのだろうか。

アリエスは歴史の中に二つの対照的な子ども観、——一つは子どもへの無関心、無配慮、大人と子どもとの未分化を特徴とする中世的子ども観、他は子どもへの愛情と教育的配慮、大人と子供の隔離を特徴とする近代的孩子観、——を見出したが⁽²⁾、団欒においても、今日の情景とは異なった形態をもって営為、存在していたのではないだろうか。⁽³⁾このことはE. フロムが、人間の性質や情熱や不安は文化的産物であると論じたように⁽⁴⁾、閉鎖社会における伝統的家族のもとでの団欒も今日考えるところのそれとは異なる形態、内容で展開されていたかもしれない。

今日、団欒の雰囲気、状態が子どもの人格形成にあたる影響は甚大であ

る。団欒を通じての家族関係の充実は子どもの精神的安定はいうにおよばず、あらゆる場面における教育を可能にする基本的前提といっても過言ではないだろう。⁽⁵⁾ もちろん子どもの人格形成、家族関係の充実、各家庭が持つ環境を初めとして様々な生活場面から築かれるもので団欒という雰囲気、状況はそれへの一助にすぎない。しかし、家族の本来性、本質をそこでの情緒性に求めるとするならば、団欒という家族の営みは健全な親子関係、夫婦関係を象徴する最も基本的な情景といえよう。

もしある特定の時代の家庭生活において、団欒をつうじての心的絆が結ばれない場合、人間はいかなる空間、場に心的安らぎ、寄るべを求めてきたのであろうか。

このような問題も含めて、団欒というものがどのようなかたちで営まれてきたかを歴史的に考証することは現代の家庭教育を考える上でも有意義なことと思えよう。

現代家庭にほどそのもつ情緒性（親密性、安息性）が求められた時代はかつてなかった。それは家庭外での生活が業績主義を基調とした競争原理に支配され、多くの緊張を強いる場として過酷なまでにも社会生活全般に迫っているからである。しかし現状は核家族化、母親の就業率の増加等により、家族交流の困難な状況にあり、心安らぐ、親密性の象徴の場である団欒を家庭生活の中で営むことは容易ではない。したがって制度、構造的には異なるが、現代家庭と同じように情緒的雰囲気が形成されにくいとされる封建的、家庭生活の中で、今日考えるような団欒がどのような形態をもって営まれていたかを考証することは、現代家庭の団欒の形成条件を探る上でも重要な示唆を教示するであろう。

小論は以上のような問題意識から、明治期後半から昭和期前半の、庶民階層の家庭に焦点をあて、①団欒がはたして歴史的連続性を有す営みであるのかどうか、②当時の生成条件と今日とのそれを比較し、団欒の本質についての考察から人格形成への影響を明確にする、ということをもととして、そこでの団欒という雰囲気、状況がどのように織りなされていたのかを探ることを当面の課題とするものである。

そこで上述したような課題を考察する端緒として、このような「団欒」という家族的営みを史的に考証することが学問的にどのような系譜にあるのかを明確にする必要がある。これは、団欒そのものがきわめて不明瞭な概念で

もあり、またこの家族的営みを取り扱った研究が極めて少ないということも考えられるが、何と云っても無意図的な教育の場である家庭生活を対象として、史的に教育の領域からアプローチするという、多領域におよぶ研究として成立しているからである。その意味で「団欒」という日常的教育現象を史的に考証することの学問的位置付けの整理は、この領域でのこころみが稀少な現時点では意義を有する試みと考える。

以上の理由から、小論では、団欒の史的考察研究の学問的位置付けについて、本研究で考えるところの方法と各領域におけるそれとを比較することにより本研究の学問的系譜を明確にしたい。

そこで問題となるのが、団欒の概念規定である。いうまでもなく「一家団欒」という術語はきわめて抽象的、多義的な意味を内包する一般用語であり、専門用語としての共通理解は得ていない。したがって、まず本研究で考えるところの団欒についての概念および、その規定方法について明示し、それをふまえた後、学問的位置付けについて考察をはかりたい。

II 「一家団欒」の概念とその規定方法について

「団欒」という術語は上述したように、多義的な概念であり、さまざまなイメージを内包している一般用語である。したがって本研究で考えるところの団欒の概念を明示する必要がある。

そこで概念規定の方法として本研究では次の二点の方法を用いた。この方法は現代家庭における団欒での調査、研究においても用いた方法であるが、まず、辞書的に理解されている内容からその概念を規定することと、もう一点は実際に子ども達が団欒に対してどのような意味、イメージを抱いているかを実証的に把握するという方法である。

この二点を本研究で考えるところの団欒に対する概念規定の方法とした場合、まず辞書的な解釈として、漢字の語源、成り立等から考察した場合、「ある囲みこまれた集団、かたまりが平和に集う状況」という意味を有していることが理解できる。

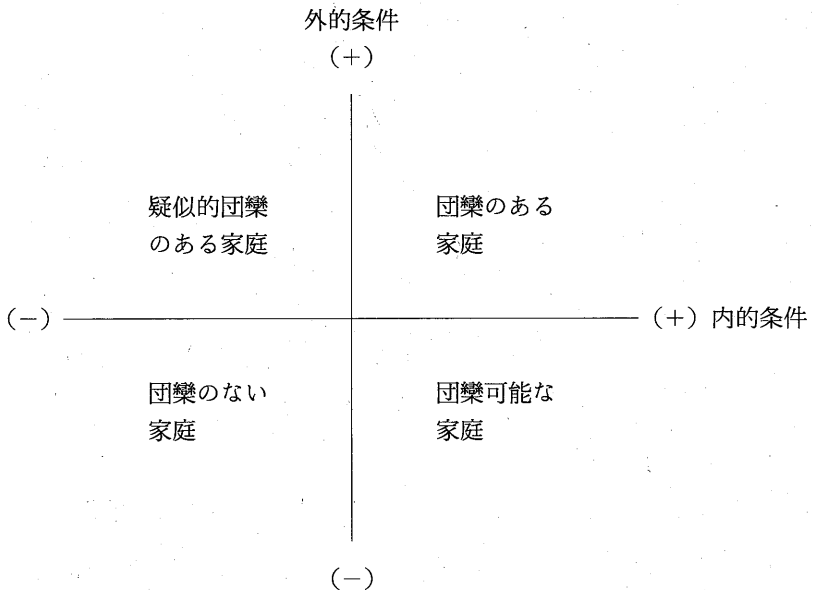
また、『日ボ辞典』（野田良治編）、あるいは大正6年、上田萬年の『大辞典』等からは、「家族の集い」「親しきもの円居」、「集って車座に座ること」等の意味をもつ語として記されている。

一方、文章完成法テスト等の実証的調査からの結果は⁽⁶⁾、外的条件とし

ては家族が集う状況にあることであり、内的条件としてはその場が楽しい、安らいだ雰囲気で充たされているということである。つまり図1でいうところの第1象限にあたるところが団樂のある家庭と規定でき得ると考える。また内包的なイメージとして表1⁽⁷⁾からもうかがえるように、子ども達は団樂を親密的、親和的、安息的なものとしてとらえている。以上の考察より本研究で考えるところの「一家団樂」として、家族が楽しく、親和的に集う状況と規定する。

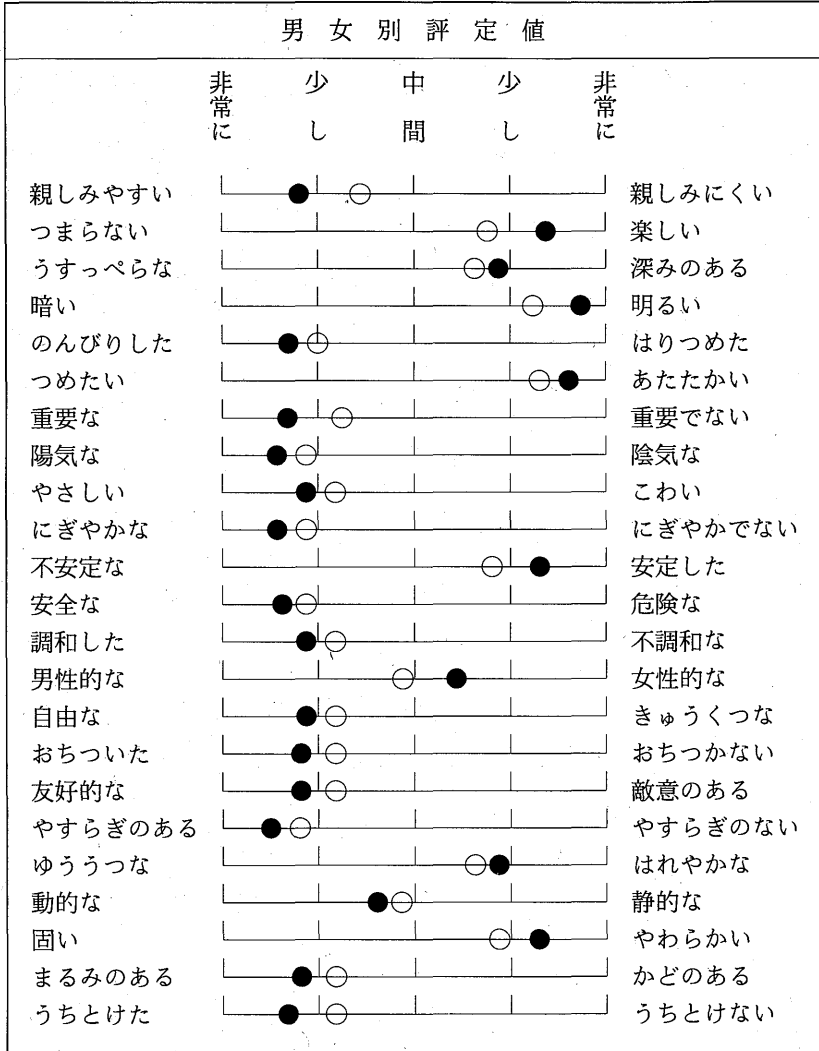
したがって、本研究の課題との関係からすると、この「家族が楽しく、親和的に集う状況」が明治期後半から大正期にかけての家庭生活において見うけられていたかどうかを考察の中心となる。

図1 「団樂」を生成する条件



外的条件 家族が集う場が日常的にある。
 内的条件 家庭生活全般に楽しい、親和的な雰囲気がある。

表1 男女別「団樂」イメージ評定のプロフィール



Ⅲ 「一家団欒」の社会史的考察の学問的位置づけ

1 「団欒」の史的考察の方法

学問的位置づけを考える第一の方法はその研究がいかなる方法論上の手法を用いているかということに集約される。そこで本研究で考えるところの方法を明示する必要があるが、それは、表2に示すような内容を主とした⁽⁸⁾、面接法による聞き書きを中心とした手法である。

表2 ききとり調査の内容

項 目	内 容
(1) 社会環境	村の歴史、人口、産業、ムラの組織、相互扶助、年令集団（子供組 若者組）
(2) 家庭環境	家屋の構造（いろりの配置等） 家族構成 生活スタイル
(3) 親子関係	(1) 父親、母親との思いで ①一緒に遊んだか（年中行事 正月時、桃の節句、端午の節句等） ②きびしかったか、やさしかったか ③楽しい思いで ④病気時の対応 (2) お産の様子 (3) 儀式、児童愛護の具現とも考えられる、お七夜、宮参り (4) 祖父母との関わり (5) しつけ全般（内容、方法）
(4) 団欒の状況	(1) 家庭生活において家族が集うことが頻繁にあったか その時の情緒的雰囲気、(SD法も含む)状況

項目内容の(3)は団欒を生成する基本的条件（図1でいう内的条件にあたる）であり、まずこの家庭生活全般の状況、情緒的雰囲気を聞き取り、それを合わせふまえ、家族が集う状況を具体的に考証（項目4）する。

2 教育的現象たる「団欒」と各研究領域との関連

表2のような面接法による、聞き書き調査そのものは、社会調査方法において極めて一般的な方法であり、調査項目、内容に関しては、民族学を中心とした領域に含まれるであろう。しかし問題は質問内容の最終的な興味が家庭生活における私的な家族交流の心的状態にあるということである。

表3は⁽⁹⁾、現代家庭の団欒の生成条件を表したものだが、この調査から

家庭生活における「一家団樂」の社会史的考察(1)

表3 「団樂」の規定要因

		(+) 団樂のある家庭		団樂のない家庭 (-)	
項	目	カテゴリー	カテゴリー-ウェイト	レンジ	偏相関係数
1	母親とのコミュニケーション	1 よくある 2 あまりない	0.142 -0.742	0.884	0.258
2	母親への評価	1 高い 2 低い	0.105 -0.639	0.744	0.192
3	夕食時の家族の参加状況	1 揃う 2 揃ったり揃わなかったり 3 揃わない	0.093 0.157 -0.411	0.568	0.197
4	夫婦関係 (仲睦まじいかどうか)	1 良い 2 普通 3 悪い	0.067 -0.093 -0.473	0.566	0.117
5	夕食後の家族の集い	1 よくある 2 時々ある 3 ほとんどない	0.194 -0.328 -0.341	0.535	0.223
6	父親の休日数	1 約二日以上 2 約一日 3 ほとんどない	0.335 -0.004 -0.180	0.515	0.151
7	両親の有無	1 父、母有 2 父、母どちらか一方	-0.053 0.460	0.513	0.129
8	父親とのコミュニケーション	1 よくある 2 あまりない	0.168 -0.275	0.443	0.172
9	家族との家庭外への外出状況 (レクリエーション、食事、旅行)	1 よくある 2 あまりない	0.167 -0.265	0.432	0.194
10	居間の有無	1 有り 2 無し	0.067 -0.269	0.336	0.129
11	家族規模	1 2~3人 2 4~5人 3 6人以上	0.131 0.001 -0.113	0.244	0.054
12	性別	1 男子 2 女子	-0.115 0.076	0.191	0.091
13	母親の就労の有無 (但し家庭所就労)	1 有り 2 無し	0.034 -0.037	0.071	0.034
14	家族形態	1 核家族 2 三世家族	0.045 -0.007	0.052	0.017
15	父親の帰宅時間	1 午後10時まで 2 午後10時を過ぎることが多い	-0.010 0.029	0.038	0.015
16	父親への評価	1 高い 2 低い	-0.007 0.024	0.031	0.001

相関比 $\eta^2 = 0.509$

団欒が成立するためには、ある親密性に充ちた情緒的雰囲気が必要十分な条件と考えており、その具体的な生成条件が母親とのコミュニケーション、評価等と考えられている。したがって、聞きとり内容においても、家族全体の集いの雰囲気を質問すると同時に、個々の関係ともいえる、母親との関係、評価、交流等の内容も重要事項となろう。この意味において中内敏夫氏が言うところの「過去の人々の意識の日常の形態を探る」という心性史の領域に近いものとも考えられる。⁽⁴⁰⁾ また、心性を決定づける重要な要因でもある人口動態学的な裏付けを必要とするものでもあろう。

このように、団欒を生成している、十分条件である家族の心理的な状況を把握することと、一方では、物的、道具的な外的な条件の考察も必要となる。例えば当時の家屋構造、生活スタイル、風習等で、より具体的な対象をとりあげれば、現代の食卓や、炬燵に代わる、「囲炉裏」等への考察である。もちろん、家庭に「囲炉裏」があり、そこへの家族の集いがあるだけで、本研究で考えるところの団欒が認められたとはいえない。あくまでも、その場が、親密的な雰囲気に包まれていることを「団欒」の条件と規定したことは上述したとおりである。この意味からすれば、この条件についての考察は二次的なものかもしれないが、やはり、団欒を考証する上では、これらの外的条件の考察は必要不可欠なものとする。

この点から、やはり民族学の知見に依るべきところがあり、事実、同様の観点、視点から、柳田はいうまでもなく、宮本常一、今和次郎等から有益な研究が報告されていることは言うまでもない。

また表4は本研究のスケッチともっとも類似した、また参考とすべき井上忠司氏の「食卓の家庭史」という社会心理学的観点からの調査内容である。⁽⁴¹⁾ 団欒の象徴的な場は家族の共食、すなわち「食卓」の場にもとめられることからこの報告は本研究と一致した方向性をもっている。とりわけ井上氏がめざすところの食卓を通じて当時の「心理的事実」を重視する点では、本研究と軌を一とすることである。

ただ本研究は人格形成との関連で団欒を捉えることを第一義とするものであるから、調査内容においては、前述したところの、内的条件（当時の親子関係、夫婦関係、その場の心的雰囲気等）が中心になってくるだろうし、とりわけその心理的事実の質的側面（例えば、快、不快のどちらの感情がその場を支配していたか等）に比重をおき吟味する必要がある。

表4 『家庭の食事に関するライフヒストリー調査』概略

お膳、ちゃぶ台、現在の三期に分け以下の項目について聴き取り調査

項 目	具 体 的 内 容
1 食事の形式と家庭環境	食事形式の実際、その呼称、時期 家族構成
2 食事の部屋	食事部屋の呼称、部屋の概略 食事以外の利用法
3 食事の際のすわり方	座席の順番、食べる場所、 全員揃ったか、座ぶとんの有無
4 ご飯以外の食事の種類	朝、昼、夜、それぞれの種類
5 食事の際のご飯の給仕の仕方	誰が、どういう順序で、 神仏へのお供え、晩酌の有無
6 食事のあとかたづけ	食後、ただちに洗浄したか、 誰が、いつ、収納場所
7 食器の共用について	種類、箸箱の存在等
8 食事の際の禁止事項	食べる順序、おしゃべりの可否、 姿勢等
9 食事の挨拶	食べはじめ、終了時
10 食事中の話題について	誰を中心に、話題の内容

井上忠司、『家庭という風景』NHK出版、176ページを参照、要約した。

このように、本研究の学問的位置付けとしては、その方法および興味からすれば、聞き書き調査を基本とした、民族学、あるいは、社会史、心性史が目的とする領域に包括されよう。しかしあくまでも、本研究の最終的な関心、興味は、当時の子ども達が団欒を通じてどのような人格形成上の影響を受けていたかという「教育」の現象にある。

3 まとめ

以上のように、研究の方法、関心から周辺諸領域との関連を考察してきたが、本研究の学問的位置付けとしては、教育学を分母として、心性史の興味、対象、そして方法論的には、民俗学に近い手法をとった系譜にあたるものである。つまり教育の歴史において、表面には出てこない匿名の民衆の、日常的な教育現象を取りあつかうという意味では中内敏夫氏のいう「教育の社会

史」の領域に属するものになろう。また小論の考察を通じて明確になってくことは、表舞台には登場しない教育の歴史研究がいかにないがしろにされてきたかということである。ましてや、日常的な家庭生活における無意図的な教育の領域においては今後の研究の充実がまたれるところである。

なお、今後の課題としては方法論上の問題として、聞き書き調査の時点において、情報提供者から、当時の私的関係、および情緒の雰囲気をいかに正確に引き出すかということがである。すなわち、心理学上の「記憶」の問題である。一般論として、例えば、「快」、「不快」の感情においても、記憶の内容に歪みが生ずるということで、結論からいうと当時の団欒の状況がどちらかといえば、「快」のものとして語られる傾向があるということである。⁽²⁾このように、本研究が「一家団欒」という極めて私的内容を含んだ家族的営みの聞き書き調査ということから、改めて面接時のルールづくりの必要がある。

引用および註

- (1) J. H. Pestalozzi, *Die Abendstunde eines Einsiedlers*, Gesammelte Werk. Bd. 8. Rascher. S. 2., 長田新訳, 『隠者の夕暮れ』, 岩波文庫, 1984年, 7ページ。
- (2) P. Ariès, *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Editions du Seuil, 1973, p.258., p.299-307., 杉山光信・杉山恵美子訳, 『子どもの誕生』, みすず書房, 1980年, とりわけ346, 374~380ページ。
- (3) 団欒の基本前提となる親子間、家族間の情愛についての歴史的連続性、非連続性についていえば、諸説考察されているが、家永三郎氏『日本文化史』岩波新書、176ページ、宮本常一『日本庶民生活史』中央公書、41~42ページ、片岡徳夫氏『日本的親子観を探る』NHK出版、189~198ページ、中谷君恵氏『子育ての歴史』三一書房、83~98ページ、そして脇田晴子編『母性を問う、上・下巻』人文書院、1985年、等の諸説を鑑みれば一定の仮説を導きだされると考える。親子間の情愛が生物学的なものに根ざすものか、文化的所産として認識するかは別にして、西欧社会に比べ日本においては親子間の情愛の強い社会として発展してきたように思える。
- (4) E. フロム, 日高六郎訳, 『自由からの逃走』, 現代社会学叢書, 昭和40年, 19~20ページ。
- (5) 拙稿, 「一家団欒の概念および教育的意義に関する一考察」, 関西学院大学文学部教育学部学科年報16号, 1990年, 19~32ページ参照。

- (6) 同上.
- (7) 1988年度教育社会学会発表時の資料を修正、要約.
- (8) 井之口章次,『民族学の方法』,講談社学術文庫,昭和52年,176~196ページを一部参考とした.
- (9) 拙稿,関西教育学会紀要12号,131~135ページ参照.
- (10) 中内敏夫,『新しい教育史』,新評論,1987年,159ページ.
- (11) 井上忠司,『「家庭」という風景』,NHK出版,昭和63年,170ページ.
- (12) 梅本堯夫,『記憶』,講座心理学第7巻,東大出版,124~125ページ.

参考文献

- 1 柳田国男,『明治文化史(風俗編)』,洋々社,昭和29年.
- 2 今和次郎,『日本の民家』,岩波文庫,1989年.
- 3 宮本常一,『庶民の発見』,講談社学術文庫,昭和36年.
- 4 同上,『愛情は子供と共に』,宮本常一著作集第6巻,未来社,1967年.
- 5 同上,『家郷の訓』,同上.
- 6 同上,『日本の子供達』,未来社,1957.
- 7 石毛直道,『食事の文明論』,中公新書,1982年.
- 8 藤本浩之輔,『明治の子ども遊びと暮らし』,本邦書籍,昭和61年.
- 9 横山浩二,『子育ての社会史』,勁草書房,1968年.
- 10 中内敏夫,「社会史としての教育史」,教育学研究第48巻2号,1981年,122~132ページ.
- 11 藤田英典,「教育社会学会における社会史的研究のための覚書」,日本教育社会学会,第40会大会資料1988年.